

特43

692

日本東京土産
初篇

027371-000-4

特43-692

東京土産

風頼亭飛龍/著

M14

ADJ-0130



風願寺飛龍戲著

日本
一品東京土産和編

燦々閣藏版

特43
133

自叙
人情も我信の時程つて移りゆくとき
一人の心も書画あつたふたりの糸糸
ハ花あつたあつた早や一むりし
花にまみれずとまらぬ人の心も花
日に移りゆくときとたは人の心は
すまじく月とすらすらと花の心は

自叙

人情と痴情の時を経つて移りゆくとき

一いついともや真実なるふかしの東

は揺るがぬ早や一むかしまきの大

河原にあらずとも人の人情は

日に移りなれたるものと大いなる時は

すまむべ月とすらすらと味はるる

10/20 11/10

ひふけたる金や二番店の一も生固す
 人情や風俗の矯り変りも知るもの
 あらぬと目に包み手にゆきしらば
 京と大石と名なれらると思ひやで主祭
 男の一班と物言ひたて寫さんとあらずか
 三鉄釘伝にものたる此中果ては
 名も身もして四方の心算を成す業

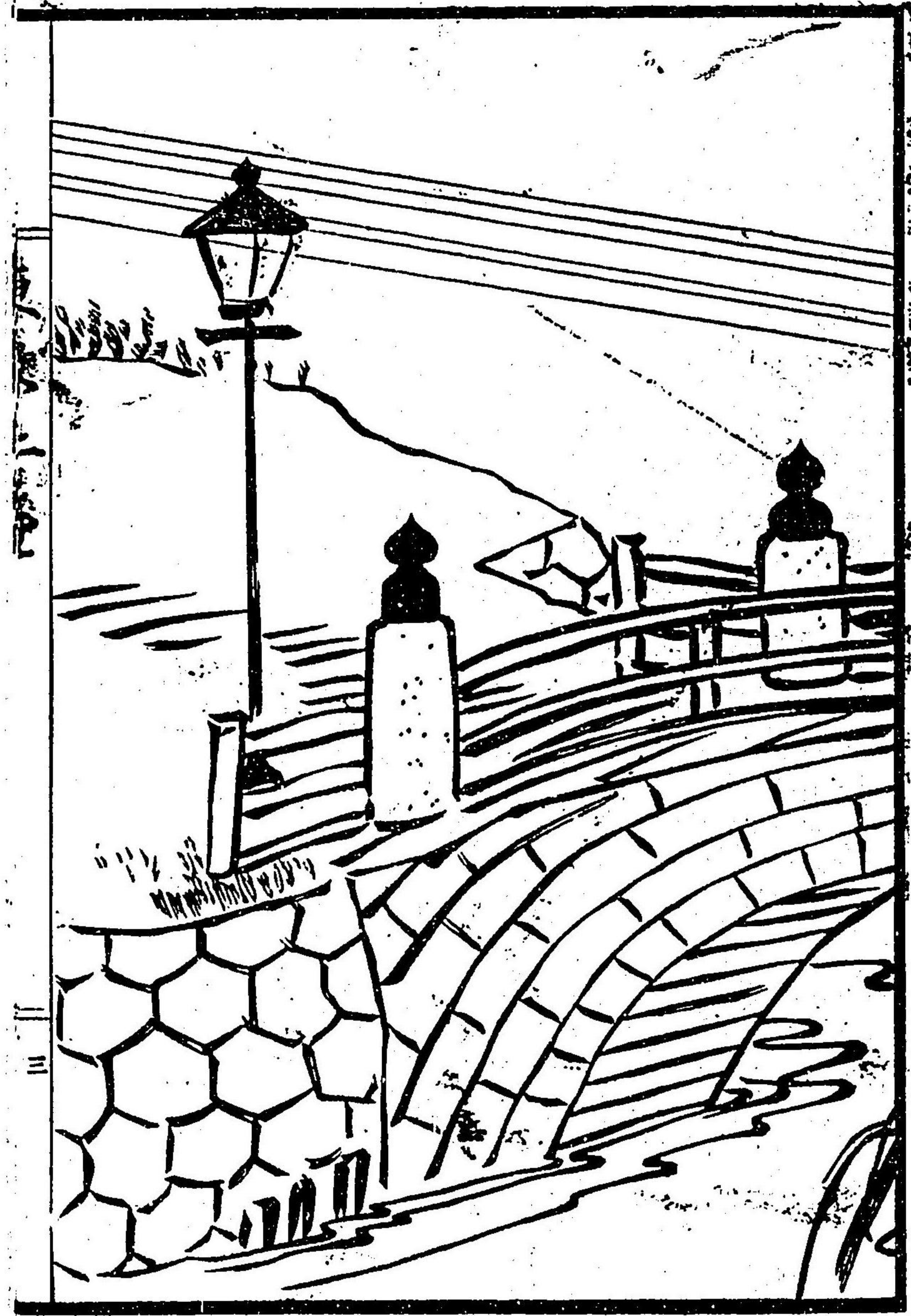
ありて衣のわのお伽とありも世に編者のあま
 いらむのう願ふ此のわに編二編三編と
 訂繕を宜しくは御末を結らんよとま
 あやまつて申すにあん

寛文十三年八月廿九日

此書なるを記す

東京橋夜景

東京橋





一品 東京土産初編

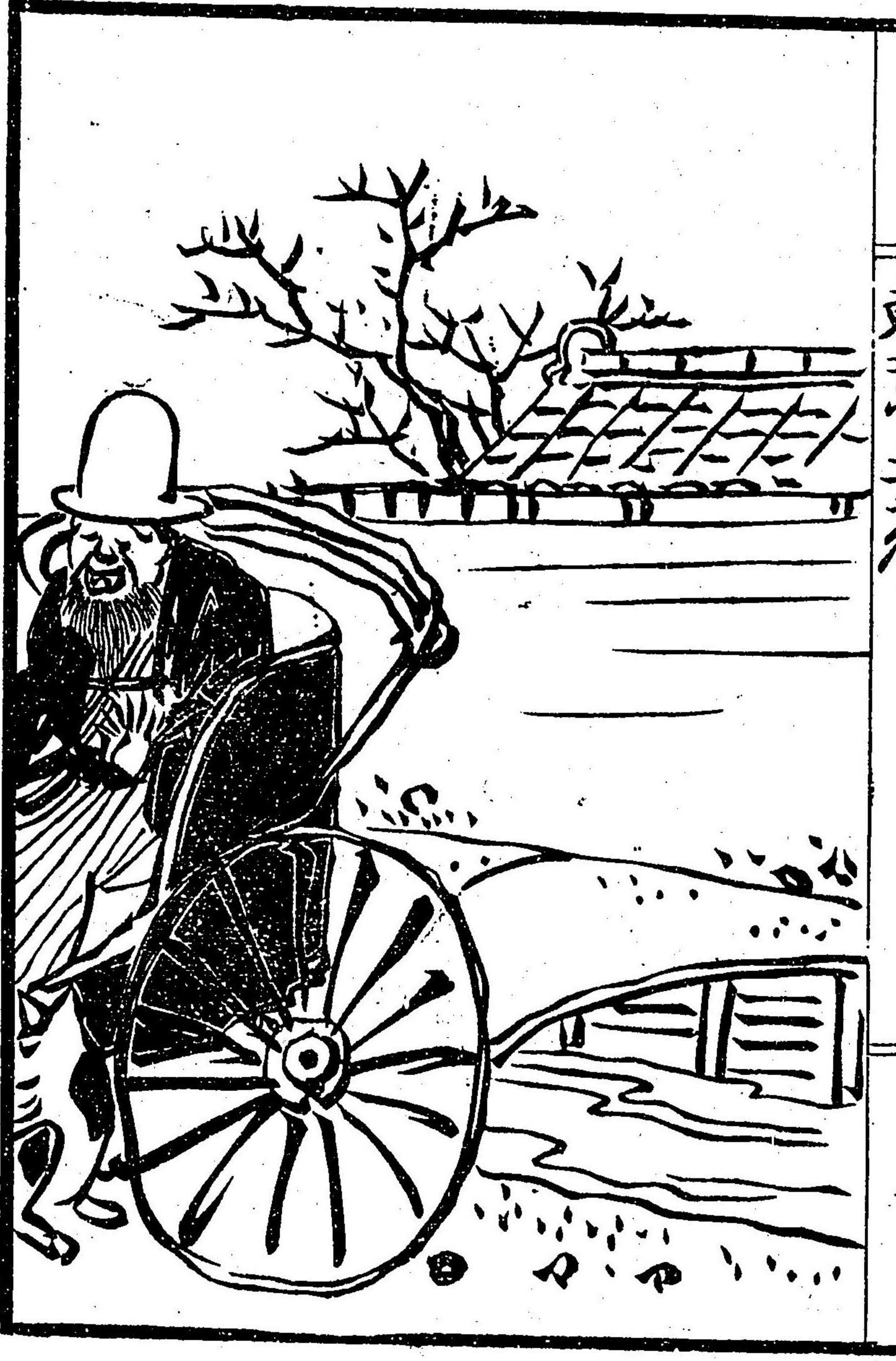
東京 風頼高飛龍戲著

○髯様

馬車のもろもろ音がラク／＼馬丁の音ハイ／＼中の
 髯さまの鼻の下にハ字のひげを剃し羅紗の海
 膝をもよおし車内せま／＼と御座さし／＼朝の九時
 に都をいで午後の三時を官衙より退いた腹で去
 関に乗うつりらるればお帰りの案内とやらある

勇一打面りコレを彼をもての仰せも待たは愛
 妻がうしろより着せ糸をすする名物を召し細君
 に茶を飲ませて下宿書齋に入り物の軟を讀
 てたする由早々の柱時計チンくと七時を告ぐれば
 夕膳にむひ一杯さうめあちら酔の酒操場は
 愛妻や侍婢あだちお戯れたまふと興じさせ
 れ酒のまらに随ひお同思ひつけらる事やあ
 りけん今更ハ業をたたらぬ用ありありと生津方

まが糸らねたなまぬ由(奔太車夫の名に支度をとせ
 重つにまらさせよと)みふる衣類に蒸くまぶら
 シヤツフと冠り細君がすこし苦みたる顔もは飯
 とを勧るをも願ふれど忍びやうに重門へ立
 びでられ棄去に少多や例の如くと身うち遊ばさ
 るや否や下宿書齋のうらたし柙橋の方
 角もむらひ人力車の機をめぐりしがガラリと
 痛身にまづと喰つて犬があらうひて吠る聲は



馳^チ車^{クルマ}之^ノ業^ノ業^ノ
走^{ソウ}行^{コウ}人^{ニン}公^{コウ}
那^ナ分^{ブン}其^シ業^ノ以^テ
看^{カン}者^{シヤ}之^ノ業^ノ
月^{ツキ}夜^ヤ也^ヤ



こくく 奔ち蓄せめと極ぐーあがら寝のち
て且つくの生似が三つと見しものぞ

○寐兒

二間半の百口は格子戸ともひけた懸りの松ハヒヨロ
くと表びチンマリと意言を構ひこれか人尚時
流行の寐兒の家より主派ある神棚に金幣の
神よみ鮫の神とてあぐ杖とてあぐり多るそ火
絆をまると鉢のうた三味線と二種とて一

表に二階のまに百ぐひにて日向の飼箱が水とり

ふむ寝子さへいお家と差向ひ相と変るお客の伴

藤子母ア夕べにぬア人駭何季のホラ何とかいつたつけぬ

エと少一えぐそりく髯助かふくか腫腫す

あつひの寝る一巻といえぬ色く口後このサアソ薄襦

以筆筆か奴ハモウく志ありけつむひサ保し時

らたう存釋の気障あのはるがあいか負的な齧

寝の寝り鮫のような面とてこれ何れか母ア



啜るる二味
獸猫人猫お押親



のそだたきつゝいふんやあつた私まやあつた
と腹がたつて堪らざらんついでに又腹痛
高つた名がなから峠の麓にたつと思つては
餘糧のあつたをあつた供の養を思つては
ねつ時をどきどきする日に出つたあつた
どつちかへ入つておれを直してさうかお母ア其
平のヤボンと出してたれと厠つて手拭ぬぐ
拭きつておれが涙を拭きヤボンと取りおれを

すしりけ出さうとすのと猫が後ろを歩いて
藤五、木へ移つて養生を格子戸がラリと後十
一時の鐘丸にはきとポーン

○ 彌先生

好羽どうねお黒屋の高帽子よすめし
由里の約りあつたマンテルチヨウキツボン何れか
洋色のつまらざる洋袴を考へ着のうへあつた
五段の髪を二三本を理に伸し退つてさう四五

人(ひと)の(ひと)金(かね)業(わざ)を(を)ま(ま)す(す)こ(こ)の(の)方(かた)の(の)出(いで)と(と)ま(ま)る(る)上(うへ)の(の)沙(さ)汰(た)
 が(が)あ(あ)ら(あら)わ(わ)ら(ら)ぬ(ぬ)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)は(は)あ(あ)ら(あら)わ(わ)た(た)が(が)先(ま)生(せい)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)定(じやう)
 め(め)と(と)あ(あ)ら(あら)わ(わ)せ(せ)ら(ら)る(る)事(こと)業(わざ)一(いち)中(ちゆう)九(く)君(きみ)が(が)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)人(ひと)の(の)指(さし)
 ま(ま)と(と)一(いち)僕(ぼく)が(が)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)電(でん)信(しん)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)人(ひと)に(に)先(ま)報(ほう)
 と(と)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)れ(れ)る(る)も(も)う(う)と(と)実(じつ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)一(いち)人(ひと)の(の)活(かつ)か(か)察(さつ)し
 一(いち)回(かい)「ホ(ホ)ン(ン)電(でん)信(しん)と(と)い(い)ふ(ふ)は(は)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)人(ひと)の(の)幸(さい)と(と)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)の(の)中(ちゆう)心(しん)
 事(こと)業(わざ)給(たま)ふ(ふ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)胃(い)中(ちゆう)と(と)い(い)ふ(ふ)人(ひと)の(の)報(ほう)答(たふ)と(と)い(い)ふ(ふ)同(どう)
 事(こと)業(わざ)だ(だ)ら(ら)ぬ(ぬ)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)毎(まい)日(にち)一(いち)人(ひと)の(の)煙(たば)こ(こ)を(を)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)り(り)吹(ふ)く(く)一(いち)人(ひと)の(の)式(しき)

用(もち)こ(こ)の(の)者(もの)種(たぐい)の(の)海(うみ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)や(や)ア(ア)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)蟹(かに)田(でん)「サ(サ)ウ(ウ)く(く)あ
 の(の)男(おとこ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)本(ほん)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)盤(ばん)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 だ(だ)ら(ら)ぬ(ぬ)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)取(と)り(り)ど(ど)の(の)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)が(が)エ(エ)レ(レ)キ(キ)の(の)力(ちから)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 恐(おそ)ろ(ろ)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)の(の)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)自(みづか)ら(ら)の(の)電(でん)信(しん)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 ま(ま)と(と)胃(い)中(ちゆう)の(の)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 ま(ま)と(と)人(ひと)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 一(いち)人(ひと)の(の)力(ちから)車(くるま)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)
 事(こと)業(わざ)に(に)あ(あ)ら(あら)ぬ(ぬ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)と(と)い(い)ふ(ふ)事(こと)業(わざ)



入来り心算あり客の傍に身を置く腹のきま
 口も聞かずまんとすりに黠妙いもどらまにあまさん何な
 一組の客「まよふか行あいな茶屋へ帰るのま黠「アはまだ
 夜のりきりゆへに升んあ客「客が明あたらうて燻しね
 一とこあめめ「黠「オカお元上障つたのちあまさん
 堪忍「まどろが痛く下まを白魚同権あま
 抱「あめい客のあまさんわくく「客「何なま
 にまじりて事もあはれぬのまどろのまよ黠「サウそれ

と知らずかきこい「ま今日ああがこみあつたので外
 をまじりて夫々こまを寝るやう寝よと思つ
 たのでツイ遅くあつたんでサアね客へ甘くいふ
 お黠「うまをこいふん「ヤアあしまきん眞實でま
 ア秘を話しのらちに客は又まきの通り夜具の
 中「まどろれ多黠「あまさん大方「まどろくならぬ
 のがまに障つたをせうか心もあつたが眞に堪はず
 よ客「呆れらる黠「まどろ情郎と申してまどろ

煙管
吸身
出思子
無量情
眼注社
波柔台



一敷
心儀
長者
天下
多



點「まアおきけなみぢいもの人ハナせ友人に廻り
 元たらう悔をいね」と首筋をノ付上唇をチヨ
 イと喰つけばおの鼻の下をニ支り長くし客へ化
 さると知りあつてひはれぬ奴を目づり下
 て吸付たむを舌を黠妙ハ後ろをむひて舌をへ
 ロリ又こまむに向き黠「いお客を捨てられぬせ
 ぬんに苦界とらぬものハマアあまさんのおぢがつひ
 ちのぞす秘へ

○若旦那

高差の人力車風をまわつてガラしく上た集
 りたるいぢの頂二十二三の若旦那様結構つむぎ
 の若物に穿んちうの羽織を多掛け糸糸がけ
 ンツペりともた都を「て車屋さん」といひし
 と横町に「うい」車多飛びせり家のまへまゐ来
 り「が早や七時だて店も閉りて居る体に流石ま
 まやうの悪く遠入りぬと彌盛「か番が目早

隱^カ天^ノ水^ノ箱



水^ノ箱^ノ人^ノ家^ノ

堂々仕程のあらめりし者一休まるるがあまり解く
 ひとへありしが出来一升向後ハチトお借みある
 まし著「博覧多」大竹み故今日のまゝいお借
 と話あつてどうも親父が娘婿をいお借もく
 とおも合をいお借りし身著親の苦みハ一機にあま
 めも困りししやしそよに待りしつる者やあ母ア
 えんぬの世お話とて著りまきし者ハ何れと
 書に傾て産へりり夏くとしに権をとりて

著人として家の親父の頑愚ぶのほろ果れらるむ
 うしから地震雷びるの親父とハ成駒やア
 秘かハテ解りしつるものごとナア

一冊に
 東土産物初編終

日本 東京土產二編 近刻
一品
右初編と共尺目洋判に宛覽し、種希富又
三編四編引續り出版し

明治十四年三月一日御届
同年四月 出版

定價金拾貳圓

東京府平民
著者兼出版人 仲田豊太郎

下谷區山伏町
十七番地

